

P-091

医療的ケアを看護師のみで実施している
D特別支援学校における学校支援プログラム
による看護師、教諭、養護教諭の変化内 正子¹、二宮 啓子²、勝田 仁美³、山本 陽子²、
清水 千香²、丸山 有希⁴、熊谷 智子⁵、原 朱美²¹神戸女子大学看護学部²神戸市看護大学³甲南女子大学 看護リハビリテーション学部⁴神戸大学 保健学研究科⁵医療法人社団思葉会MEIN HAUS

【目的】

医療的ケアを看護師のみが実施しているD校に対して、医療的ケアの支援として1年間の学校支援プログラムの介入を行い、看護師、教諭、養護教諭の医療的ケアに関する認識の変化を明らかにした。

【方法】

研究対象者はD校の看護師6名、教諭16名、養護教諭1名。調査方法は無記名自記式質問紙調査。プログラムの介入前後にデータ収集を行った。質問内容は、学校での役割と困難感、医療的ケアに関する情報獲得、各職種との連携等である。介入方法はアクションリサーチの手法を参考に、医療的ケアの実施・支援体制に関するアクションプランの作成と評価のために会議を行い、学校関係者が選択したアクションプランを実施した。分析方法は記述統計およびWilcoxonの符号付順位検定を行い、自由記載は質的に分析した。研究代表者の所属機関研究倫理委員会の承認を得た。

【結果】

介入後に、D校の医療的ケアの状況がやや改善したと評価した者は、看護師67%、教諭38%であった。自身の利益があったのは看護師67%、教諭44%、養護教諭100%で、「病状悪化した児への対応基準が明確になった」「職員間で共有できた」であった。看護師の変化：「看護師の人員不足」「緊急時の判断の役割分担」「指示書のある児への緊急時対応への困難感」が低くなった。また、「学校と病院の違いが知れた」「他の看護師と共有できた」「看護師への管理職のサポートが得られるようになった」と認識していた。教諭の変化：「ケア実施に際し保護者や看護師とのコミュニケーションに困る」「児の体調の判断に困る」「児の重症度が高くなり不安である」ことが有意に低くなった。また、看護師の役割として「教諭が判断したケア実施のタイミングの確認」を十分に果たしていることが有意に高くなった。養護教諭の変化：看護師の役割が明確になったが、看護師との役割分担の困難さや教諭と看護師の役割調整、緊急時の判断についての役割分担の困難さが増していた。

【考察】

看護師のみが医療的ケアを実施していることで、看護師が学校における自身の役割を明確に認識し、管理者の支援を得ながら教諭に工夫して働きかけたことにより、教諭の困難さが軽減したのではないかと考える。本プログラムを実施したことで、各職種の考えや役割を理解し共通認識できたと考える。 科研費補助事業（基盤C：20K10942）の助成を受けて実施した。

P-092

重症心身障害児の自立活動に対する
リハビリテーション専門職の役割
-学校教諭の困りごとの特徴に基づく
学校コンサルテーションの視点-

濱田 匠

鈴鹿医療科学大学保健衛生学部 リハビリテーション学科

【はじめに】

重症心身障害児（重症児）の特別支援教育の自立活動における学校教諭の困りごとは、障害特性の把握の難しさや発達状態の考慮など、さまざまな様相を呈している。学校教諭の困りごとを解決するため、理学療法士や作業療法士、言語聴覚士（リハビリテーション専門職）による学校コンサルテーションの必要性が指摘されている。本研究の目的は、リハビリテーション専門職による学校コンサルテーションの充実に向けた示唆を得るために、重症児の自立活動に対する学校教諭の困りごとの特徴を明らかにすることとした。

【方法】

全国の347の肢体不自由や病弱の特別支援学校（各校の代表者1名）を対象に、重症児の自立活動に対する学校教諭の困りごとについて、無記名による自由回答記述の質問紙調査を行った。テキストマイニングの分析方法を用いた。

【結果】

回答は81校（回収率：23.3%）で、回答者の学校教諭歴は平均20.3年（標準偏差±9.4）であった。共起ネットワーク分析の結果、学校教諭の困りごととして、「授業展開の制約がある状況下における身体の状態や表出に応じた指導内容」、「主体的な学習を促すための多くの要因から構成される方略」、「リハビリテーション専門職との有効な連携」、「運動発達や運動障害の評価に基づく支援」、「『身体動き』に対する理解不足やできることの少なさ」、「実態把握や評価の方法と目標や課題の設定」、「特別支援教育の専門性」、「学校生活につながる医療職との連携」の8個のサブカテゴリーを命名した。また、8個のサブカテゴリーから、①「障害特性や発達状態に適した指導方略」、②「指導方略の実践適応」、③「医療職の専門的な視点の導入」の3個のカテゴリーを命名した。

【考察】

リハビリテーション専門職による学校コンサルテーションの視点として、①学校教諭一人ひとりの重症児の障害特性や発達状態に対する理解度に応じて、実態把握や目標設定を補完すること、②重症児の心身機能・身体構造に適合した机などの物理的な環境調整や、教材・教具の選択や活用方法の提案、介助方法の提案、③リハビリテーション専門職の専門的な視点に基づく助言や指導に関する内容を、自立活動に適応する内容に変換して提供することが必要であると考えられた。